

《解説》

藤元優子

ここに訳出したのは、イラン人女性作家シーヴァー・アラストゥーイーの未刊の短編小説三編である。これらは、二〇一二年九月に訳者がテヘランで作家本人から預かった原稿を元にしてゐる。アラストゥーイーの言によれば、この五年ほど新刊の許可が下りないばかりか、彼女の既刊の小説も再版できない状態である。このような事態がひとりアラストゥーイーのみの問題でないことは、ここ数年、現代文学作品の出版が押し並べて低調であることから明らかで、その主原因は検閲による創作活動への露骨な妨害である。だが、もし何らかのきっかけでその傾向に変化が見られるようになったとしても、いくつかの理由で、この三作品を含むアラストゥーイー作品の出版にはより困難が伴うことが予想される。その理由を知るため、まず、著者の経歴について簡単に紹介したい。

シーヴァー・アラストゥーイーは、一九六二年にテヘランで生まれた。イスラーム革命当時十七歳で、彼女のある作品の言葉を借りれば、「にわか革命分子」になった世

代のひとりである。彼らは、八〇年代の文化革命と八年に及ぶイラクとの戦争に二〇代の月日を踏みにじられた世代でもある。

アラストゥーイーは、その八〇年代にテヘラン大学で医療補助や産業公衆衛生を学び、その知識を生かして前線で看護活動に従事したほか、九〇年代以降各地で起こった地震災害でも、積極的にボランティア活動を行ってきた。また、他にもボディ・ビルディングのコーチをしたり、映画製作に携わったりと、彼女の社会的活動は多岐にわたっている。

その傍ら、大学で英語を学び、一九八九年から四年間は、著名な作家・批評家であるレザー・バラハニーによる小説のワークショップで創作を学んだ。そして、一九九一年の小説『彼に会って私は美しくなった』を皮切りに、短編小説集三編、長編小説七編のほか、詩集三編も著したが、そのうち四編は出版許可が下りず、一編はドイツで出版されている。短編集『太陽と月はまた廻る』は一九九八年度に二つの国内文学賞を受賞、また、長編小説『ビービー・シャハルザード』(二〇〇一)によってスウェーデン文学協会の奨学金を獲得した。一九九七年以降は、個人的に、またさまざま

な大学で、文学創作のワークショップを開き、教え子の中には国内で活躍する作家も出るようになってゐる。

ブライベートな生活では、大学進学と共に結婚して男子を設けるが離婚。その後は文学創作の師匠であるバラハニーを始めとする様々な有名人と恋愛関係を重ね、その経験を隠すどころか作品にも反映させてきた。束縛を嫌い自由を求める彼女のそのような生き方に眉をひそめる保守派も少なく、作品自体が色眼鏡で見られて、出版や再版許可の妨げとなつてきた。もちろんもっと本質的に、作品自体の持つ政治性、社会性の高さゆえに、また愛情表現が現政権の許容範囲を超えるがゆえに、検閲によって撥ねられる作品群も存在する。だが、アラストゥーイーは節を曲げるつもりはないらしく、二〇一二年には大学での教職を失う事態に至り、いくつもの未刊の作品を抱えながらも、映画監督となつた息子とのコラボレーションの計画を、楽しみに記者に語ってくれた。

アラストゥーイーの作風は、文体も内容も技巧的・実験的で、時には鼻につくほどの文学的知識をひけらかす場面もある。だが、豊かな人生経験を活かした彼女の小説世界

の多様さ、豊かさは、同世代の作家の中でも特異な輝きを放っている。

「アトラス」

恋愛結婚して住んだ袋小路の二階屋。階下からは四六時中黙たちの鳴き声が聞こえ、隣室には異形の女性——なんとも謎めいた設定である。夫に熱愛され、可愛い子どもたちにも恵まれた主人公アトラスの暮らしは、一見幸せそうで、階下の夫婦も、隣人夫婦も優しく、声に悩まされる以外に悩みはない。だが、同居者の誰ひとりとしてその声について語らない事実が、その暮らしの足下の危うさへの彼らの恐怖を物語る。そして、アトラスの叔父が訪れて真実が暴かれるが、叔父もまたその家の優しい人々に取り込まれ、彼らの暮らしはひっそりと続いていく。

一九七〇年代のテヘランを舞台に描かれたこの作品は、マジックリアリズム的手法を用いて、人がある状況に感じながらもされていく様を象徴的に描いている。そこに取り込まれた人々は、それぞれの立場でその状況を咀嚼し、消化し、生き残ろうとする。そこでは真実は人を害するだけの無

用の長物であり、それを理解しないでおくように耳を塞ぎ、本を読んだり眠ったりするのが、穏やかな幸せを得る秘訣である。真実がおぞましいものなら、避けて通るのが賢明なのか。それを人に隠すのは優しさなのか、残酷さなのか。人間が生きる意味についての多くの問いを含んだ作品である。なお、ルーズベ・ハーンという人物は、実は短編小説「太陽と月はまた廻る」(二〇〇三年)にも登場している。そこでは酒浸りの唯物論者で、書庫に本をたくさん抱える老人の姿である。『すばる』(二〇〇八年二月号)に前田君江氏による翻訳があるので、その老人の若かりし頃のエピソードとして、この短編を読んでみるのも一興である。

「サラダ」

作家の看護師としての従軍経験が書かせた短編である。前線に派遣されたばかりの看護師の目で、野戦病院で日常化した血なまぐさく無感情な身体断片処理の有様を描きつつ、そこにおぞましい妊娠中絶手術を重ね合わせることで、人が人の命を奪うことの意味／無意味を女性の立場から照射

している。とくに、残酷な死を迎える声なき負傷者と胎児を冷徹に対比させることで、国家権力によって正当化された人殺しと、法の目をかいくぐって秘密裏に処分される胎児殺しにどんな違いがあるのかという問題提起が行われている。また、胎児に対しては「加害者」となる妊婦が、素人の施術で「被害者」として死んでいく姿に、彼女を死に追いやった理不尽な状況に対する女性としての作家の怒りも感じ取れる。手法としては、野戦病院における口紅と白衣、血と包帯という赤と白、生と死との対比、負傷兵と胎児や妊婦の腕と手、足、目のイメージの連なり、妊婦と「私」の爪を用いた映像的な結末など、アラストゥーイーの鮮やかな描写力が光っている。

「きみとトルストイ」

いわゆる「アラブの春」に先駆けて二〇〇九年にイランで起こった民主化支持の運動は、参加者が連帯の印として緑のテープやリボン等を身につけていたことから、「緑の運動」と呼ばれている。大統領再選にあたり、票が大幅に操作されたと主張する人々が行った抗議が発端であったが、静か

に整然と平和的なデモ行進を行うことで、当局に弾圧の言いがかりを与えまいとした。だが、運動が盛り上がりを見せると、危機感を抱いた当局は民兵組織を中心とした勢力を投入してこれを鎮圧、デモの見物人を含む死者も出たし、逮捕者も続出して、その後民主化運動は大きく後退した。この作品で、「行進し、何も言わず、ひどい目に遭わず、握手し合い、別れを告げた」人々とは、明らかにこの運動の参加者を指している。

しかし、作家は傍観者の女の目を通して語ることで、この運動を冷静に眺める必要を示唆する。息子と夫を追って外出した女は、タクシー運転手に「革命？」と行き先を尋ねられて、「くわばらくわばら」と答える。一九七九年の革命を当初支持したに違いない中年世代は、熱に浮かされて行動することの怖さを知り尽くしている。再び革命を求めているのか、と尋ねられれば、答えは「ノー」なのではないのか。「革命(広場)」から「自由(広場)」に向かうデモは、それゆえ鳥合の衆の心許ない行進に見える。女の夢として語られる大小の動物たちが、その象徴である。そして、善意の群衆も些細な扇動で簡単に残酷な加害者にもなり得る

ことが、投降した軍関係者を痛めつける光景によって示される。

主人公の女は、学生に文学を教える教師であることから、作家自身の投影といえるだろう。女が教え続けてきたトルストイの箴言も、ゴリーキーの被抑圧者擁護の台詞も、直面する現実には用をなさない。イスラーム革命でも、緑の運動でも、結局社会を主体的に導く役割を果たせなかった知識人階級の無力感が伝わってくる。

ただ、作家は、自分の分身に生身の女としての生活感を与えることも忘れない。女には、仕事をそっちのけにしても夫との愛情を確かめ合いたい気持ちもあるし、成り行きで巻き込まれたデモの最中でも、夕食の準備が気になって仕方がない。そして、そんな女性のバランス感覚が、政治的熱狂の裏に隠された欺瞞も見抜いてしまう。大皿の上に残った鶏の胸肉を冷蔵庫に入れるか、その場で食べてしまうか、という選択肢によって「緑の運動」の行く末を暗示した点に作家のウィットを感じさせられる作品である。